

第7回 美旗市民大学紙上講座 ～どんどで疫病退散 美旗中村～

本年度はコロナウィルス感染拡大防止のため美旗市民大学講座を「美旗市民センターだより」の紙面にて、テーマを「美旗まち歩き」として展開しています。*今までの資料は当センターにあります。



美旗中村 大和時代には小波田と共に、三野（身野）とよばれた地域で、*① 稲置（いなぎ）が置かれたほど早期に開発せられた土地。*② 大和朝廷の官職の一つ。稲穀の収納を職務とした。

美旗中村のどんど もともとは疫病が流行り、悪疫を防ぐため村の入り口に建て始まったという「どんど」は、全国的にも各地で見られる行事です。名張市内の各村々でもこのどんどをやっていますが、美旗中村のものは、高さ17mにもなる大きなもので、その内部には子どもが10人くらい入れるほどで、市内で一番大きなものです。もとは子ども達だけで作り小正月の1月15日に点火していましたが、現在は「美旗中村どんど保存会」のメンバーで製作し、成人の日に点火しています。朝7時に大福寺金井住職による「撥遣（はっけん）の作法」でおふだの守護にお礼を申し上げ、その後、子どもたちが点火しています。



①青竹12本（うるう年には13本）と同じ数のくいを打つ。



②12本の芯棒を縄で巻き、保存会のメンバーで三方から引っ張り芯棒を起こし、円錐形の小屋を建てる。



③この小屋を竹と藁で葺き、円形のかまくらを作る。頭頂部には「馬」とよばれるわら細工を取り付ける。



④高さ17mの立派などんどが完成

小さな「宵どんど」も子ども達を中心に作られ、技術の継承になっています。宵どんどは前日の夕方19時に点火。



⑤村人が集まり正月のお飾りやお札などを一緒に焼き、この火で餅を焼き食べ豊作と無病息災を祈る。

山の神「かぎひき」 昔から山の神は、春は里に下りて田の神になり、秋は山に登って山の神になると伝えられてきました。山の神は美旗地内でも五ヶ所ありますが、新年のカギヒキという祭事を、中村は盛大に行っています。毎年新年の1月7日早朝に山の神の鳥居にウツギの木で「カギ」と呼ばれる又木にして掛け、カギヒキ歌（右図参照）を歌いながら豊作を祈っています。

*山の神は女性だといわれており、この祭りは男性だけで行う。（女人禁制）



「山の神鍵引歌」
謹請再拝五穀成就 家内安全守らせ給へ
大日本は国の始まり 大和の国の糸錦も
京大阪の銭釜も 加賀越前のお米も
近江の国の鍋釜も 伊勢の国の魚も塩も
中村の此の地の参詣人の許へ
皆引き寄せ給へ



大福寺

大福寺のご本尊は大日如来ですが、その昔、中村にあった遍照寺（現在の池の台集会所辺り）のご本尊、薬師如来も安置されています。*写真向かって左：大日如来 右：薬師如来 この「へんじょうじ」から、比円丈（ひえんじょう）という小字名が、現在の池の台辺りに付けられたようです。

白山権現

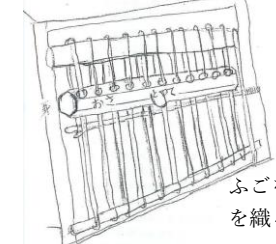
中村の宮ノ前という場所である祠は、昔から「白山権現」と呼ばれて祀られています。「はくさん」から「歯」と「くさ」の神さんとして親しまれ、歯が痛い時や皮膚のただれなどある時にお参りすると治るとか・・・その昔はこの祠の前で相撲をとったりしました。



ハ斗ふご
ふごにはもみ殻などを
入れ、運搬用として使用



三斗ふご
オウコとよばれる棒
で担いだ



ふごを織る機械（村の人がむしろを織る機械を改良して作った）

特産品 ふご 農閑期に村人が製作し、藁と麻縄で作られている。この麻縄は中村独特の「クレ染め」と呼ばれる技法で、うるしの葉を煮出し、泥とこねた中に麻縄を浸けて作られ、ふごの底の仕上げに使用された。「出来たふごは伊賀一円はむろん、伊勢・大和まで行商に歩いた。「中村のふご」といえばどこへ行っても名が通っていた。」と名張市史に記されているように品質が大変良かった。

最終回は、2月号の第8回
「もっと知りたい美旗古墳群」です。